

42582

教科書文庫

4
815
51-1913
20000 68974

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

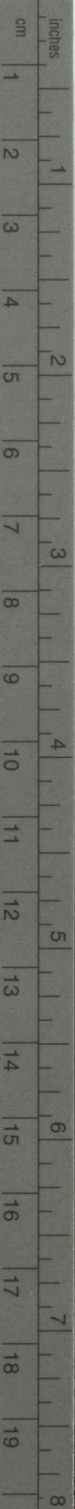


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



教科書文庫
4
815
51-1913
2000068974

教育部定檢 師範學校國語教科書 二月九年十日

文學士吉澤義則編

日本文法

東京 光風館藏版



資料室

教科書文庫
4
815
51-1913
2000068974

教育部檢定
 大正二年九月十日
 師範學校國語教科書

50
 815
 大2

文學士吉澤義則編

日本文法

東京 光風館藏版

広島大学
 教
 68974
 圖書

広島大学図書
 2000068974


日本語文法

例言

- 一 本書は中等學校に於ける日本文法教習用として編纂したるものなり。
- 一 教習用として編纂したるものなれば、配列法は専ら便宜に従へるのみならず、修辭上の注意をも加へたる所尠からず。
- 一 第二十五章は且は既得の知識を總括せしめむがため、且は便宜的に配列せられたる諸説の檢索に便ならしめむがために設けたるものなれば、特に項數を擧げたり。

大正元年十二月

編者識

日本文法

目次

序説	一頁
第一章 名詞	二
第二章 代名詞	六
第三章 數詞	一一
第四章 形容詞	一五
第五章 動詞	一八
第六章 助動詞	三
第七章 動詞と助動詞との連續	五

第八章	助動詞相互の連續	六
第九章	副詞	七〇
第十章	語の轉用	七三
第十一章	轉換の接尾詞	七六
第十二章	限定詞	八一
第十三章	言と辭	八五
第十四章	文素附獨立語及び句	八七
第十五章	關係詞	九三
第十六章	他動詞・自動詞附主語の轉換	一〇〇
第十七章	接續詞	一〇三
第十八章	感動詞	一〇九
第十九章	呼應	一一一

第二十章	節の種類	一一五
第二十一章	文の種類	一一八
第二十二章	文素の位置及びその倒置	一二三
第二十三章	文素の省略	一二六
第二十四章	文の解剖	一二九
第二十五章	品詞法及び文章法	一三四
附録		
	文法上許容すべき事項	一三九

日本文法 目次終

日本文法

序説

文法

日本文法

言語は思想交換上闕くべからざるものにして、おのづから一定の法則あり。この法則を研究する學問を文法といふ。言語は國によりて異なり、英國には英國の言語あり、支那には支那の言語あり。而して我國語の法則を研究する學問を日本文法といふ。一國語に於ても談話の際と、筆録の際と相異なる事あり。

口語・文語

談話の言語を口語といひ、然らざるを文語といふ。
我國語の如きも文・口兩語相異なり。

第一章 名詞

(一) 東郷大將は對馬海峽に於てバルチック艦隊を滅し
たり

櫻の花雪のやうに散る

彗星は東に出る

勉強は幸福の母なり

東郷大將・對馬海峽・バルチック艦隊・櫻花雪・彗星・東・勉強・幸福

名詞

母の如く物の名を表はす語を名詞といふ。

(二) 名詞に二種あり。

固有名詞

甲 東郷大將・對馬海峽・バルチック艦隊の如く特種の名を
あらはすものあり。これを固有名詞といふ。

普通名詞

乙 櫻花・雪・勉強・幸福・母の如く汎種の名をあらはすもの
あり。これを普通名詞といふ。

(三) 左の文につきて名詞を指摘せよ。

(イ) 明日校庭に於てテニスの競技會あり

(ロ) 目には青葉山ほととぎす初鰹

(ハ) 鹿島香取は姉妹艦なり

(ニ) 善を勧め惡を戒む

(ホ) 孔子・釋迦・基督を世界の三聖といひます

(ハ) 山を下りて野に出ると日ははや森に沈んで居る

(ト) アレキサンデル大王はマケドニアの王子であります

(四) 右摘出せる名詞を分類せよ。

(五) 御殿の御簾をかかげて御庭の雪を見はやし給ふ

み山の櫻散りすぎてを田に友よぶ蛙の聲やうやう

かまびすしくなりぬ

この書は新版が出ましてから古版は全く賣れなく

なりました

御み・を・新・古はそれぞれ名詞、殿・簾・庭・山・田・版の首に加はりて、

或は意義を添へ、或は語勢を助くるものなり。

これを接頭詞といふ。

接頭詞

(六) 友だち數人と共に遠足を試みたり

義經等は宇治より馳せのぼる

高木君は我が校の選手です

たち等君はそれぞれ名詞、友・義經・高木の尾に加はりて、或意

義をそふるものなり。

これを接尾詞といふ。

接尾詞

接頭詞・接尾詞を總括して添加詞といふ。

(七) 左の文につきて添加詞を指摘せよ。

(イ) み空に高くひらめく旗かけ勇ましともをし

(ロ) を山田の畦の細道ふみわけて來る農夫あり

(ハ) 山田君は今日御父君と上京致され候

添加詞

格尾訓

- (二) 電車よりも汽車が却つて御便利に候
- (ホ) 吉田さんは明日お出でになります
- (ヘ) 先生がたが御出席になりました
- (ト) 工夫が素肌になつて働いてゐます
- (チ) 初春の御よろこび申上げ候
- (リ) さ夜ふけて四方に人聲絶えにけり
- (ヌ) 乃木將軍は吾吾の信仰すべき神様です

(六) 右の添加詞を分類せよ。

第二章 代名詞

(九) 彼はここにてバルチック艦隊を滅せり

代名詞

指示代名詞

あの花雪のやりに散る
 彗星はこちらに出る
 それは幸福の母なり
 彼・こ・あ・こちら・それはそれぞれ東郷大將對馬海峽・櫻東勉
 強に代用せられたるものなり。
 かく物の名に代用せらるる語を代名詞といふ。
 (一〇) 代名詞に二種四類あり。

甲 指示代名詞

- (イ) あ・そのの如く事物の名稱に代用せらるるもの
- (ロ) このの如く場所の名稱に代用せらるるもの
- (ハ) こちらの如く方角の名稱に代用せらるるもの

人稱代名詞

乙 人稱代名詞

かれの如く人間の名稱に代用せらるるもの
(二) これらの代名詞を表示する事左の如し

指示代名詞		場所代名詞		事物代名詞		
口語	文語	口語	文語	口語	文語	
こ	こ	こ	こ	これ	これ	近稱
こつち	こなた	こ	こ	それ	それ	中稱
そ	そなた	そ	そ	あれ	あれ	遠稱
そつち	あなた	あそこ	かしこ	など	な	不定稱
あ	あ	ど	いづこ	にれ	いづれ	
あつち	あなた	こ	いづか		いづれ	
ど	ど					
どつち	いづれ					

この他僕君妾卿等の如く、名詞の人稱代名詞に轉用せらるるもの多し。

《注意》人稱代名詞には尊卑によりて用例に嚴重なる區別あり。讀書の際よく注意すべし。

(三) 左の文につきて代名詞を指摘せよ。

- (イ) 陛下は親しく演習を統監あらせらる
- (ロ) 殿下の御大勇は武將の鑒と申すべし
- (ハ) 閣下未だこれを聞き給はずや

人稱代名詞		
口語	文語	
わ	余	自稱
わたくし	余	對稱
お	汝	對稱
おまへ	汝	對稱
あ	彼	他稱
あのかた	彼	他稱
だ	誰	不定稱
だ	誰	不定稱
な	誰	不定稱
な	誰	不定稱

- (ニ) この大雪にいづこにか今宵は宿を借らむ
- (ホ) 貴君はいつ御歸省なされしか
- (ヘ) この度のことはどなたへも通知致さず候
- (ト) あちらこちら歩さまはつて終に君の宅の前に出た
- (チ) そこにもここにも花が咲いて居る
- (リ) どこに行つても自分を用ゐてくれる人がない
- (ヌ) だれでもあのひとの行に感服せぬものはない

(三) 右の例題になき代名詞を用ゐて簡單なる文五種を作れ。

- (四) 右二項に用ゐられたる代名詞を分類せよ。
- (五) 汝らの職分を忘るるな
あなたさまは何處の學校へ御出になりますか

接尾詞

らさまはそれぞれ代名詞汝あなたの尾に加はりて、複數又は尊敬の意義をあらはす接尾詞なり。

(二六) 左の文につきて接尾詞を指摘せよ。

- (イ) いづかた様へも御無音にうち過ぎ居り候
- (ロ) 私どももそれには賛成でございます
- (ハ) 君がたの云ふ事は信用が出来ぬ
- (ニ) 足下等に送られて郷關を出でしは實に十年の昔なりき

第三章 數詞

(二七) 鳥の埒もとむとて三つ四つ二つ飛びゆくが見ゆ

數詞

彼は家を出でて三年歸らざりき
習慣は第二の天性なり
五つめの隧道最も長し

三つ・四つ・二つ・三・二・五つの如く數を示す語を數詞といふ。

(二八) 數詞に二種あり。

分量數詞

甲 右、三つ・四つ・二つ・三の如く分量を示すものを分量數詞
といふ。

序次數詞

乙 右、二・五つの如く序次を示すものを序次數詞といふ。

(二九) 日本の人口はいくばくありや

何號の列車に御乗りなさいますか

いくばく・何は分量・序次の不定數を示すものなり。

接尾詞

(三〇) 第二の第は接頭詞にして三年・五つめ・何號の年・め・號は
接尾詞なり。

序次數詞は必ず添加詞を要するものなり。

《注意》數詞のとるべき接尾詞にはそれぞれ用例あり、讀書の際よく注意
すべし。

(三一) 刀ヤ一トつ振

七ナつ日

三ミつ年

いクつ日

右の如く訓にて用ゐらるる分量數詞が接尾詞と結合する
場合には、語の一部を失ふものなり。

體言

名詞・代名詞・數詞これを體言といふ。

(三) 左の文について數詞を指摘せよ。

(イ) 二號の型が最もよい

(ロ) 第一着が二時二十三分かかつた

(ハ) 一双の屏風と三幅對の掛物とを求む

(ニ) 賞として太刀一腰・扇子一合を賜ふ

(ホ) 一人百發づつの彈藥を携帯せり

(ヘ) 波に洗はるる岸の老松幾千年經たりと知らず

(ト) 僕は何回目カヨチの競走に加はるのですか

(三) 右數詞を分類せよ。

(三) 接尾詞冊・脚・張・尾を用ゐて文を作れ。

可
二
分
科

一
二
カ
ヤ
カ
ウ

一
二
カ
ヤ
カ
ウ

留
居

形容詞

活用

第四章 形容詞

(三五) よし早くとも行かむ

まだ時間早し

美しき花咲き出でたり

あまりに美しければ折りとりて家裏にせむ

早し・美しの如く物の状態・性質等をあらはす語を形容詞と

いふ。

(三六) 形容詞は場合に應じて形を變化すること前項に示せるが如し。

かかる現象を活用といふ

(三七) 形容詞の活用に二種あり。

語幹	第一活用 (連用)	第二活用 (連體)	第三活用 (終止)	第四活用 (已然)
早	ハヤ	ハヤ	ハヤ	ハヤ
美	ウツクシ	ウツクシ	ウツクシ	ウツクシ

はやうつくしの如く變化せざる部分を語幹といひ、く・き・し・けれの如く活用する部分を語尾といふ。

形容詞は必ず二種何れかの活用をなすものなり。

(三) 左の文について形容詞を指摘せよ。

- (イ) 父母の恩は山よりも高く海よりも深し
- (ロ) 波浪はげしくして航海甚だ難し

活幹にハヤ
活尾にウツクシ

牙一形容詞

(三九) 右形容詞につきて活用圖を作れ。

語幹	第一活用 (連用)	第二活用 (連體)	第三活用 (終止)	第四活用 (已然)
早	ハヤ	ハヤ	ハヤ	ハヤ
美	ウツクシ	ウツクシ	ウツクシ	ウツクシ

口語に於ける形容詞の活用は一種のみ。

(三三) 二八項の例を口語文に改めよ。

(三三) 晝もを暗きまでに樹木茂りあひたり

今日はなま暖い風が吹いて身體がけだるい

接頭詞

を暗きなま暖いけだるいのをなまけは接頭詞なり。

(三) 左の文について形容詞の接頭詞を指摘せよ。

(イ) 彼方に見ゆるこ高き松の下に馳せゆき候へ

(ロ) いや高き富士の高嶺

(ハ) か弱い舟で大海を渡るといふ大膽な國民

(ニ) 空が俄かにまっ黒になつた

第五章 動詞

(三四) 文書か(ず) 書き(て) 書く 書く(事) 書け(ども)

人死な(ず) 死に(て) 死ぬ 死ぬる(事) 死ぬれ(ども)

山有ら(ず) 有(り) 有り 有る(事) 有れ(ども)

動詞

かく動作・状態又は存在をあらはす語を動詞といふ。

動詞も活用する事右に示せるが如し。

(三五) 動詞の活用に九種あり。

(イ) 四段活用

(ロ) 奈行四段變格活用

(ハ) 羅行四段變格活用

(ニ) 加行三段活用

(ホ) 佐行三段活用

(ヘ) 上二段活用

(ト) 下二段活用

(チ) 上一段活用

(リ) 下一段活用

是なり。

(三) 四段活用圖

結止
連体
命令

	加行	佐行	多行	波行	万行	羅行	諸詞
	書	話	勝	言	讀	折	連續
第一活用 (將然)	かか	はなさ	かた	いは	よま	をら	む・ず
第二活用 (連用)	かき	はなし	から	いひ	よみ	をり	たり・き
第三活用 (終止)	かく	はなす	かつ	いふ	よむ	をる	と
第四活用 (連體)	かく	はなす	かつ	いふ	よむ	をる	時
第五活用 (已然)	かけ	はなせ	かて	いへ	よめ	をれ	ども・ば
第六活用 (命令)	かけ	はなせ	かて	いへ	よめ	をれ	

かく四音に活用する故に四段活用といふ。

(注意) 四段活用の動詞は阿行奈行也行和行にはなし。

(七) 奈行四段變格活用圖

	死	諸詞
	第一活用 (將然)	む・ず
	第二活用 (連用)	たり・き
	第三活用 (終止)	と
	第四活用 (連體)	時
	第五活用 (已然)	ども・ば
	第六活用 (命令)	

四音に活用することは四段活用にかはらねどもぬるぬれと活用する事彼と異なるを以て變格といふ。

(注意) この活用をなす動詞は死去の二語のみ。

(三) 羅行四段變格活用圖

	居	諸詞
	第一活用 (將然)	む・ず
	第二活用 (連用)	たり・き
	第三活用 (終止)	と
	第四活用 (連體)	時
	第五活用 (已然)	ども・ば
	第六活用 (命令)	

四音に活用する事は四段活用に同じと雖も第三活用彼と異なるを以て變格といふ。

〔注意〕 この活用をなす動詞は有り居り待りの三語のみ。

〔三〕 加行三段活用圖

諸連 詞續	來	第一活用 (將然)	第二活用 (連用)	第三活用 (終止)	第四活用 (連體)	第五活用 (已然)	第六活用 (命令)
	こ	き	く	くる	くれ	こ	
諸連 詞續	む・ず	たり・さ	と	時	ども・ば	よ	

〔注意〕 この活用をなす動詞は來の一語のみ。

〔四〕 佐行三段活用圖

諸連 詞續	爲	第一活用 (將然)	第二活用 (連用)	第三活用 (終止)	第四活用 (連體)	第五活用 (已然)	第六活用 (命令)
	せ	し	す	する	すれ	せ	
諸連 詞續	む・ず	たり・さ	と	時	ども・ば	よ	

〔注意〕 この活用をなす動詞はす(爲)おはす(御座)の二語のみ。されど欲す感ず等の如くす(爲)の結合によりて成れる動詞もこの活用に從ふ。

〔四〕 上二段活用圖

諸連 詞續	加行	第一活用 (將然)	第二活用 (連用)	第三活用 (終止)	第四活用 (連體)	第五活用 (已然)	第六活用 (命令)
	生	いき	いき	いく	いくる	いくれ	いき
諸連 詞續	多行	落	あち	あつ	あつる	あつれ	あち
	波行	強	しひ	しふ	しふる	しふれ	しひ
諸連 詞續	万行	恨	うらみ	うらむ	うらむる	うらむれ	うらみ
	也行	老	あひ	あゆ	あゆる	あゆれ	あひ
諸連 詞續	良行	下	あり	ある	あるる	あるれ	あり
	諸連 詞續	む・ず	たり・さ	と	時	ども・ば	よ

五音中イ列ウ列に活用する故に上二段活用といふ。

〔注意〕 阿行佐行奈行和行にはかく活用する動詞なし。

〔四〕 下二段活用圖

	阿行	加行	佐行	多行	奈行	波行	万行	也行	良行	和行
	得	受	載	出	兼	整	改	榮	顯	植
第一活用 (將然)	え	うけ	のせ	いて	かね	ととのへ	あらため	さかえ	あらはれ	うゑ
第二活用 (連用)	え	うけ	のせ	いて	かね	ととのへ	あらため	さかえ	あらはれ	うゑ
第三活用 (終止)	う	うく	のす	いづ	かぬ	ととのふ	あらたむ	さかゆ	あらはる	うう
第四活用 (連體)	うる	うくる	のする	いづる	かぬる	ととのふる	あらたむる	さかゆる	あらはるる	ううる
第五活用 (已然)	うれ	うくれ	のすれ	いづれ	かぬれ	ととのふれ	あらたむれ	さかゆれ	あらはるれ	ううれ
第六活用 (命令)	え	うけ	のせ	いて	かね	ととのへ	あらため	さかえ	あらはれ	うゑ
連續諸詞	むず	たりさ	と	時	どもば	よ				

五音中ウ列・エ列に活用する故に上二段活用に對して下二

段活用といふ。

(三) 上一段活用圖

	阿行	加行	奈行	波行	万行	和行
	射	著	似	乾	見	用
第一活用 (將然)	ゝ	き	に	ひ	み	もちゐ
第二活用 (連用)	ゝ	き	に	ひる	みる	もちゐる
第三活用 (終止)	ゝる	きる	にる	ひる	みる	もちゐる
第四活用 (連體)	ゝる	きる	にる	ひれ	みる	もちゐる
第五活用 (已然)	ゝれ	きれ	にれ	ひれ	みれ	もちゐれ
第六活用 (命令)	ゝ	き	に	ひ	み	もちゐ
連續諸詞	むず	たりさ	と	時	どもば	よ

(注意) 佐行・多行・也行・雜行にはかく活用する動詞なし。

(四) 下一段活用圖

	第一活用 <small>(將然)</small>	第二活用 <small>(連用)</small>	第三活用 <small>(終止)</small>	第四活用 <small>(連體)</small>	第五活用 <small>(已然)</small>	第六活用 <small>(命令)</small>
蹴	け	け	ける	ける	けれ	け
諸詞	むず	たりさ	と	時	どもば	よ

〔注意〕 この活用をなす動詞は蹴の一語のみ。

動詞は必ず九種のいづれにか活用するものなり
形容詞・動詞これを用言といふ。

用言

〔望〕 左の文について動詞を指摘せよ。

- (イ) 爾に出づるものは爾にかへる
- (ロ) 生きて再び君を見ることなからむ
- (ハ) 智をみがかき徳を修めよ
- (ニ) 強ひて問ひ侍りしも答へなかりき
- (ホ) 掟におぢよ火におぢよ

- (ハ) 九分は足らず十分はこぼると知るべし
- (ト) 見る間に西の空に墨を流せるが如き雲起りぬ
- 〔奥〕 右の動詞を活用によりて分類せよ。
- 〔望〕 加行三段活用と左行三段活用との相違を圖によりて示せ。

加行三段活用	例	第一活用	第二活用	第三活用	第四活用	第五活用	第六活用
左行三段活用							

〔奥〕 羅行四段活用と羅行四段變格活用とを圖によりて示せ。

〔望〕 口語動詞の活用は五種あり。

〔イ〕 四段活用

(口) 加行三段活用

(ハ) 佐行三段活用

(ニ) 上一段活用

(ホ) 下一段活用

これなり。

(五) 左の諸問に答へよ。

(イ) 死ぬの活用を示せ。

死		第一活用	第二活用	第三活用	第四活用	第五活用	第六活用
口語	文語	な	ら	ぬ	ぬ	ぬ	ぬ
		ら	ら	ら	ら	ら	ら
		ぬ	ぬ	ぬ	ぬ	ぬ	ぬ
		ぬ	ぬ	ぬ	ぬ	ぬ	ぬ
		ぬ	ぬ	ぬ	ぬ	ぬ	ぬ
		ぬ	ぬ	ぬ	ぬ	ぬ	ぬ

(ロ) 有りの活用を示せ。

イ キル イキル イキル イキル イキル

(三) 文語の活用

動詞	第一活用	第二活用	第三活用	第四活用	第五活用	第六活用
死	な	ら	ぬ	ぬ	ぬ	ぬ
生	ま	ま	ま	ま	ま	ま
寝	ま	ま	ま	ま	ま	ま
食	ま	ま	ま	ま	ま	ま
飲	ま	ま	ま	ま	ま	ま
読	ま	ま	ま	ま	ま	ま
書	ま	ま	ま	ま	ま	ま
行	ま	ま	ま	ま	ま	ま
立	ま	ま	ま	ま	ま	ま
坐	ま	ま	ま	ま	ま	ま
臥	ま	ま	ま	ま	ま	ま
立	ま	ま	ま	ま	ま	ま
坐	ま	ま	ま	ま	ま	ま
臥	ま	ま	ま	ま	ま	ま

(ホ) 得の活用を示せ

口語動詞活用圖

種 類	四 段 活 用										加 行 三 段 活 用	佐 行 三 段 活 用	上 一 段 活 用										下 一 段 活 用				
	例	書	話	勝	死	言	讀	有	來	爲	生	落	似	乾	見	報	下	居	得	受	任	捨	兼	甚			
第一活用 (將然)	カ カ	ハ ナ サ	カ タ	シ ナ	イ ハ	ヨ マ	ア ラ	コ	シ セ	イ キ	オ チ	ニ	ヒ	ミ	ム ク イ	オ リ	キ	エ	ウ ケ	マ カ セ	ス テ	カ ネ	タ ヘ				
第二活用 (連用)	カ キ	ハ ナ シ	カ チ	シ ニ	イ ヒ	ヨ ミ	ア リ	キ	シ	イ キ	オ チ	ニ	ヒ	ミ	ム ク イ	オ リ	キ	エ	ウ ケ	マ カ セ	ス テ	カ ネ	タ ヘ				
第三活用 (終止)	カ ク	ハ ナ ス	カ ツ	シ ヌ	イ フ	ヨ ム	ア ル	ク ル	ス ル	イ キ ル	オ チ ル	ニ ル	ヒ ル	ミ ル	ム ク イ ル	オ リ ル	キ ル	エ ル	ウ ケ ル	マ カ セ ル	ス テ ル	カ ネ ル	タ ヘ レ				
第四活用 (連體)	カ ク	ハ ナ ス	カ ツ	シ ヌ	イ フ	ヨ ム	ア ル	ク ル	ス ル	イ キ ル	オ チ ル	ニ ル	ヒ ル	ミ ル	ム ク イ ル	オ リ ル	キ ル	エ ル	ウ ケ ル	マ カ セ ル	ス テ ル	カ ネ ル	タ ヘ レ				
第五活用 (已然)	カ ケ	ハ ナ セ	カ テ	シ ネ	イ ヘ	ヨ メ	ア レ	ク レ	ス レ	イ キ レ	オ チ レ	ニ レ	ヒ レ	ミ レ	ム ク イ レ	オ リ レ	キ レ	エ レ	ウ ケ レ	マ カ セ レ	ス テ レ	カ ネ レ	タ ヘ レ				
第六活用 (命令)	カ ケ	ハ ナ セ	カ テ	シ ネ	イ ヘ	ヨ メ	ア レ	ク レ	セ コ	イ キ	オ チ	ニ	ヒ	ミ	ム ク イ	オ リ	キ	エ	ウ ケ	マ カ セ	ス テ	カ ネ	タ ヘ				

口語動詞活用圖

種 類		四 段 活 用																加 行 三 段 活 用		佐 行 三 段 活 用		上 一 段 活 用									下 一 段 活 用					
例		書	話	勝	死	言	讀	有	來	爲	生	落	似	乾	見	報	下	居	得	受	任	捨	兼	堪	詰	消	連	植								
第一活用 (將然)	カ カ	ハナ サ	カ タ	シ ナ	イ ハ	ヨ マ	ア ラ	コ	シ セ	イ キ	オ チ	ニ	ヒ	ミ	ム ク イ	オ リ	オ リ	エ	ウ ケ	マ カ セ	ス テ	カ ネ	タ ヘ	ツ メ	キ エ	ツ レ	ウ エ									
第二活用 (連用)	カ キ	ハナ シ	カ チ	シ ニ	イ ヒ	ヨ ミ	ア リ	キ	シ	イ キ	オ チ	ニ	ヒ	ミ	ム ク イ	オ リ	オ リ	エ	ウ ケ	マ カ セ	ス テ	カ ネ	タ ヘ	ツ メ	キ エ	ツ レ	ウ エ									
第三活用 (終止)	カ ク	ハナ ス	カ ツ	シ ヌ	イ フ	ヨ ム	ア ル	ク ル	ス ル	イ キ ル	オ チ ル	ニ ル	ヒ ル	ミ ル	ム ク イ ル	オ リ ル	オ リ ル	エ ル	ウ ケ ル	マ カ セ ル	ス テ ル	カ ネ ル	タ ヘ ル	ツ メ ル	キ エ ル	ツ レ ル	ウ エ ル									
第四活用 (連體)	カ ク	ハナ ス	カ ツ	シ ヌ	イ フ	ヨ ム	ア ル	ク ル	ス ル	イ キ ル	オ チ ル	ニ ル	ヒ ル	ミ ル	ム ク イ ル	オ リ ル	オ リ ル	エ ル	ウ ケ ル	マ カ セ ル	ス テ ル	カ ネ ル	タ ヘ ル	ツ メ ル	キ エ ル	ツ レ ル	ウ エ ル									
第五活用 (已然)	カ ケ	ハナ セ	カ テ	シ ネ	イ ヘ	ヨ メ	ア レ	ク レ	ス レ	イ キ レ	オ チ レ	ニ レ	ヒ レ	ミ レ	ム ク イ レ	オ リ レ	オ リ レ	エ レ	ウ ケ レ	マ カ セ レ	ス テ レ	カ ネ レ	タ ヘ レ	ツ メ レ	キ エ レ	ツ レ レ	ウ エ レ									
第六活用 (命令)	カ ケ	ハナ セ	カ テ	シ ネ	イ ヘ	ヨ メ	ア レ	コ	セ	イ キ	オ チ	ニ	ヒ	ミ	ム ク イ	オ リ	オ リ	エ	ウ ケ	マ カ セ	ス テ	カ ネ	タ ヘ	ツ メ	キ エ	ツ レ	ウ エ									

《注意》

- 一 同語といへどもその活用の文語と異なる點に注意せよ。
- 一 文語の奈行四段變格活用羅行四段變格活用の動詞は口語に於ては皆四段に活用す。
- 一 文語の上下二段活用は口語に於てはそれ／＼上下一段活用に變じたり。
- 一 口語に於ては五種活用を通じて第三第四兩活用形相同じ。
- 一 口語は地方によりて異なるれども殊に注意して標準語法に従ふべし。

(口) 加行三段活用

有		
口語	文語	
有	有	第一活用
有	有	第二活用
有	有	第三活用
	有	第四活用
	有	第五活用
	有	第六活用

(ハ) 蹴るの活用を示せ。

蹴		
口語	文語	
	は	第一活用
	け	第二活用
	け	第三活用
	け	第四活用
	け	第五活用
		第六活用

(ニ) 鑄るの活用を示せ。

鑄		
口語	文語	
	い	第一活用
	い	第二活用
	い	第三活用
	い	第四活用
	い	第五活用
	い	第六活用

(ホ) 得の活用を示せ。

得		第一活用 第二活用 第三活用 第四活用 第五活用 第六活用					
口語	文語	エ	エ	エ	ウ	エ	エ
		エ	エ	エ	ウ	エ	エ

(へ) 下るの活用を示せ。

下		第一活用 第二活用 第三活用 第四活用 第五活用 第六活用					
口語	文語	下	下	下	下	下	下
		下	下	下	下	下	下

(ト) 任すの活用を示せ。

任		第一活用 第二活用 第三活用 第四活用 第五活用 第六活用					
口語	文語	任	任	任	任	任	任
		任	任	任	任	任	任

任すの活用を示せ。

第六章 助動詞

(五) 姓名を記さしむ

運動を好まず

梅の枝を折らせ給ふ

しむずせ給ふの如く主として動詞に連続して、その意義を補ふものを助動詞といふ。

助動詞も活用すること後項に示すが如し。

(五) 助動詞は意義上より分ちて

(イ) 時の助動詞

(ロ) 推量の助動詞

助動詞

時の助動詞

の十種とす。

- (ハ) 受身の助動詞
 - (ニ) 可能の助動詞
 - (ホ) 使役の助動詞
 - (ヘ) 尊敬の助動詞
 - (ト) 打消の助動詞
 - (チ) 指定の助動詞
 - (リ) 希望の助動詞
 - (ヌ) 比況の助動詞
- (五三) 時の助動詞
- (イ) 鳥歌ひ蝶舞ふ

伊勢

月明に乗じて舟を浮ぶ
 茲に一人あり
 舞ふ・浮ぶありは動詞第三活用にて終止せるものにして、現在の動作又は存在をあらはすものなり。

- (ロ) 立つべき時は來ぬ
 直に枝を折りつ
 午前中に復習を了りたり
 疾くに學校に行けり
 今まで運動せり
- 來タ
 折ッタ
 了ッタ
 行ッタ
 運動シタ
- ぬ・つたりはそれぞれ動詞に連続して、その恰も完了せることをあらはす助動詞なり。

	第一活用 (將然)	第二活用 (連用)	第三活用 (終止)	第四活用 (連體)	第五活用 (已然)	第六活用 (命令)
ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ぬ
つ	て	て	つ	つる	つれ	て
たり	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ
り	ら	り	り	る	れ	れ

〔注意〕 花美しく咲きたり

咲イテヲル

架上に萬卷の書を積み

積ンデアル

りたりは動詞の性質によりテヲル・テアルと譯すべき場合あり。かかる場合は動作の既に定まりて、定まれる有様の連続せるを示すものなり。

(ハ) 去夏は富士山に登りき

登ツタ

昔男有りけり

有ツタ

きけりはそれぞれ動詞に連続して、その過去に起りしこと

をあらはす助動詞なり。

	第一活用 (將然)	第二活用 (連用)	第三活用 (終止)	第四活用 (連體)	第五活用 (已然)	第六活用 (命令)
き			き	し	しか	
けり	(けら)	(けり)	けり	ける	けれ	

〔注意〕 「けら」「けらずや」と用ゐる時の外は用例なき形なり。

(ニ) 花は明日咲かむ

咲カウ

來五日此處にて會合せむ

會合セウ

むは動詞に連続して、その未來に起るべきことをあらはす助動詞なり。

	第一活用 (將然)	第二活用 (連用)	第三活用 (終止)	第四活用 (連體)	第五活用 (已然)	第六活用 (命令)
む			む	む	め	

(四) 左の文について時の助動詞を指摘せよ。

- (イ) 春は來ぬれど花咲かず
- (ロ) 馬を早めて行きつる程に山の麓にて追ひ付きたり
- (ハ) 従者をば歸せつわれはなほ奥深く進めり
- (ニ) 急ぎ行きしかどもえあはざりき
- (ホ) 不思議の狐のさま見て來むとて一人行きけり
- (ヘ) 花咲かば告げむといひし山里の使來れり
- (ト) 余が行きし時は彼すてにあらざりき
- (チ) よく勉強せしもその效驗あらはれざりき

20

(五) 右時の助動詞を分類し、且つ活用せしめよ。

花咲かまし

咲クダラウ

推量の助動詞

次號の雜誌は面白かるべし
 今日現在は音樂會あるらし
 人や見む
 神も知るらし
 風や吹きけむ
 まし・べし・らし・めり・むらむけむはそれぞれ動詞に連続して、
 推量の意義をあらはす助動詞なり。

オモシロイデアラウ
 有ルラシイ
 見ルダラウ
 知ツテ居ルダラウ
 吹イタデアラウ

べし	べく	べき	べし	べけれ
まし	まし	まし	まし	ましか
らし	らし	らし	らし	らし
第一活用 (連用)	第二活用 (連體)	第三活用 (終止)	第四活用 (已然)	

			第一活用 (將然)	第二活用 (連用)	第三活用 (終止)	第四活用 (連體)	第五活用 (已然)	第六活用 (命令)
む					む	む	め	
らむ					らむ	らむ	らめ	
けむ					けむ	けむ	けめ	

(五七) 左の文について推量の助動詞を指摘せよ。

- (イ) いづち行きけむ行方知らずなりにき
- (ロ) 今宵の月夜いかにちもしろかるらむ
- (ハ) 川上の櫻散りぬらし
- (ニ) 今日雨にてみ山の雪も消ゆべし
- (ホ) 弟妹の我を待つらむ様俤に見ゆ
- (ヘ) あはれ今年の秋も暮れむとす
- (ト) いざや兒等山にも野にも行かまし

(五八) 右推量の助動詞を活用せしめよ。

受身の助動詞

(五九) 受身の助動詞

甲野球團乙野球團に破らる 破ラレル
 松陰罪せらる 罪セラレル

るらるはそれぞれ動詞に連続して、受身の意義をあらはす助動詞なり。

		第一活用 (將然)	第二活用 (連用)	第三活用 (終止)	第四活用 (連體)	第五活用 (已然)	第六活用 (命令)
る	れ		れ	る	る	るれ	れ
らる	られ		られ	らる	らるる	らるれ	られよ

(六〇) 左の文について受身の助動詞を指摘せよ。

- (イ) 討たれても親の杖なつかしければ去りやらず
- (ロ) 散々に討ちなされて唯一騎逃げのびたり
- (ハ) 棟梁の材に用ゐらる

- (二) 褒めらるるとも譏らるるとも更に意に介せず
- (ホ) 扶けられて階段を上る

(六二) 右受身の助動詞を活用せしめよ。

(六三) 可能の助動詞

この書ならば余にも読まるべし 読マレルダラウ
 顕微鏡にて見らる 見ラレル
 力能く山をも抜くべし 抜カレル

可能の助動詞
 るらるべしはそれぞれに動詞に連続して、可能の意義をあ
 らはす助動詞なり。
 べしの活用は推量の助動詞に同じ。
 るらるの活用は受身の助動詞に同じ。

〔注意〕

一 受身のるらる及び推量のべしと、可能のるらる及びべしとの識
 別は文勢による外なし。

一 読マレル 読メル
 行カレル 行ケル

口語四段活用に限りて可能助動詞に二様あり。

(六三) 左の文について可能の助動詞を指摘せよ。

- (イ) 千里の海も渡るべし
- (ロ) 千仞の山も越えられざることあらむや
- (ハ) 道暗くして寸歩も運ぶべきやうなし
- (ニ) 立つに立たれず居るに居られず
- (ホ) 漸く少しづつ読まるるやうになりたり

(六四) 右可能の助動詞を活用せしめよ。

(六五) 使役の助動詞

敵を走らす

走ラセル

算術を勉強せさせ

勉強サセル

敵情を見しむ

見サセル

使役の助動詞

す・さす・しむはそれぞれ動詞に連続して、使役の意義をあらはす助動詞なり。

	第一活用 (將然)	第二活用 (連用)	第三活用 (終止)	第四活用 (連體)	第五活用 (已然)	第六活用 (命令)
す	せ	せ	す	する	すれ	せ
さす	させ	させ	さす	さする	さすれ	させ
しむ	しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめ

(六六) 左の文について使役の助動詞を指摘せよ。

(イ) 墨は餓鬼にすらせよ

(ロ) 路險なれば強力に後を押させて昇る

(ハ) 義経を遣して平氏を討たしむ

(ニ) 一つ一つ撿めさせしに一も正しきはなかりき

(ホ) 先人をして知るあらしめば何とかいはむ

(ヘ) 人をして見しむれば果して伏兵あり

(ト) 商ひせさせて世渡るたつきとす

(六七) 右使役の助動詞を活用せしめよ。

(六八) 尊敬の助動詞

將軍陣頭に進まる

進マレル

殿下花を御覽ぜらる

御覽ゼラレル

法王寂光院に御幸ならせ給ふ

御幸遊バサレル

微臣の忠言をもよく入れさせらる

尊敬の助動詞

御聽キナサレル
御急ギナサレル
訪ネマスハズ
申上マシタ
拜ミ申ス
過ギマスル
見マスサヘ

以仁王は奈良にと急ぎ給ふ
とくにも訪ね申すべきに
その事は先日申上候ひき
天顔を拜し奉る
光陰は矢よりも早く過ぎ侍り
若君を見参らするだに涙の種なり

るらるせさせ給ふ申す候ふ奉る侍り参らすはそれぞれ動詞に連続して敬意をあらはす助動詞なり。
るらるの活用は受身助動詞に同じく、すさすの活用は使役の助動詞に同じ。

申す候ふ奉るの活用は動詞四段活用に、参らすのは動詞佐行下二段活用に同じ。
又 天皇紫宸殿に出御あり
明日午後上京致すべく候
今年は大に勉強仕るべし
わざと御出下さるに及ばず
の如く名詞に連続して敬意を表はす助動詞あり。
ありは動詞有りの活用にして、下さる致す仕るはいづれも動詞四段活用に同じ。

お出マシニナル
上京致シマス
勉強シマス
御出下サルニ

（注意）

一 受身可能使役尊敬の助動詞は形同じければ文勢によりて識別

せざる可らず。
一 尊敬の助動詞に又しむあれども今全く用ゐらるる事無きを以て省く。

(六) 左の文について尊敬の助動詞を指摘せよ。

- (イ) 近侍のものを召し出さる
- (ロ) 汝の振舞いと殊勝のことなりと仰せられき
- (ハ) 御家人の中岡崎の城守るべきものを選ばせらる
- (ニ) 御庭の萩を御覽せさせ給ふ
- (ホ) みづから御手を下させ給ふ
- (ヘ) 深く先非を後悔遊ばさる
- (ト) 陛下親しく大演習を統監あらせらる
- (チ) この御烏帽子を召され候へとて着せ参らす
- (リ) 一々御答申すにも及ばぬ事と存じ候



打消の助動詞

(七) 右尊敬の助動詞の活用を示せ。

(七二) 打消の助動詞

勞を厭はず

厭ハヌ

在學中一日も缺席せざりき

缺席シナカツタ

ずざりはそれぞれ動詞に連続して、打消の意義をあらはす助動詞なり。

	第一活用 (將然)	第二活用 (連用)	第三活用 (終止)	第四活用 (連體)	第五活用 (已然)	第六活用 (命令)
ず	ず	ず	ず	ぬ	ね	
ざり	ざり	ざり	ざり	ざる	ざれ	ざれ

君の恵を身におはば胡沙吹く風も寒からじ

寒クアルマイ

彼は招くとも来るまじ

來マイ

じまじは推量の打消をあらはす助動詞なり。

	第一活用 (連用)	第二活用 (連體)	第三活用 (終止)	第四活用 (已然)
じ		じ	じ	じ
まじ	まじく	まじさ	まじ	まじけれ

風激しくして船を出す能はず 出スコトガデキヌ

能はずは不可能をあらはす助動詞なり。

	第一活用 (將然)	第二活用 (連用)	第三活用 (終止)	第四活用 (連體)	第五活用 (已然)	第六活用 (命令)
能はず	能はず	能はず	能はず	能はぬ	能はね	

(七三) 左の文について打消の助動詞を指摘せよ。

- (イ) 大王のへにこそ死なめかへりみはせじ
- (ロ) 思はぬ災難に遭ひぬ
- (ハ) 目こそ見えぬそれほどの事などか爲ざらむ
- (ニ) 知らざるを知らずとせよこれ知れるなり
- (ホ) 今日御出出来まじくや御伺申上候
- (ヘ) すまじき事もいふまじき事も數多あるものぞ
- (ト) 試みずして爲す能はずといふこと勿れ

(七三) 右打消の助動詞を分類し且つ活用せしめよ。

(七四) 指定の助動詞

指定の助動詞

彼は飽くまで獨力にて學ばんとするなり

學バウトスルノダ

余は去ぬるなり

去ルデス

なりは動詞に連続して、指定の意義を表はす助動詞なり。

地球は遊星の一なり

一デアル

君は君たり臣は臣たり

臣ダ

なりたりは又種々の語に連続して、同じく指定の意義を表はす。

	第一活用 (將然)	第二活用 (連用)	第三活用 (終止)	第四活用 (連體)	第五活用 (已然)	第六活用 (命令)
なり	なら	なり	なり	なる	なれ	なれ
たり	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ

〔注意〕このたりは完了助動詞のたりとは全く異なり。

希望の助動詞

〔五〕希望の助動詞

人は皆かくありたし

アリタイ

一度は歐米にも行かまほし

行キタイ

たしまほしは動詞に連続して、希望の意義をあらはす助動詞なり。

	第一活用 (連用)	第二活用 (連體)	第三活用 (終止)	第四活用 (已然)
たし	たく	たさ	たし	たけれ
まほし	まほしく	まほしさ	まほし	まほしけれ

〔六〕左の文について希望の助動詞を指摘せよ。

- (イ) 親もなし妻なし子なし板木なし金もなければ死にたくもなし
- (ロ) 見たく聞きたき事は山山なり
- (ハ) せめて亡きあとをだに弔はまほしく思ふなり
- (ニ) 余も彼が如き筆をこそ得まほしけれ

比況の助動詞

(七) 比況の助動詞

歲月流るる如し

行くこと飛ぶが如し

如しは動詞に連りて、比況の意義をあらはす助動詞なり。

落花雪の如し

有れども無きが如し

わが如く物思ふ人はあらし

如しは又種々の語に連りて、比況の意義をあらはす。

如し	第一活用 (連用)	如く	第二活用 (連體)	如き	第三活用 (終止)	如し	第四活用 (已然)
----	--------------	----	--------------	----	--------------	----	--------------

(注意) 如しは動詞以外の語に連るには必ずのがを要するなり。

(八) 左の文について助動詞を指摘せよ。

(イ) 光陰は矢の如し寸陰も空しくすべからず

(ロ) 日も暮れて物のあやめも見えずなりぬ

(ハ) 讀みて了解せられぬ事はあるまじ

(ニ) 一番汽車にてたちたければ四時に起き

(ホ) 公明正大なれといはれたり

(ヘ) 世をうしと山に入る人山にてもなほうき時はいづちゆくらむ

(ト) 春過ぎて夏來るらし

(チ) 大臣大將たる者輕輕しく事をあぐべからず

(リ) 咲かざらば櫻を人の折らましや櫻の仇は櫻なりけり

(ヌ) 御簾をかかけて庭の雪を御覽せさせ給ふ

(ル) 群臣の拜賀を受けさせらる

(ヲ) 犬馬の勞少しも厭ふところに候はず

(ワ) 聖人は盛徳ありて容貌愚なるが如し

(カ)とやせましかくやせましと心のみ急がるなり
 (ヨ)佐久間象山は松陰の罪に連坐して幽閉せらる

(七) 時の助動詞を用ゐて文を作れ。

(八) 尊敬の助動詞を用ゐて文を作れ。

(一) 動詞の四段活用と同様なる活用を有する助動詞を摘出せよ。

(ロ) 動詞羅行四段變格活用と同様なる活用を有する助動詞を摘出せよ。

(ハ) 動詞の佐行三段活用及び佐行下二段活用と、使役助動詞すゝすの活用との異同を示せ。

(ニ) 形容詞と同様なる活用を有する助動詞を示せ。

(ホ) 助動詞活用の種類をあげよ。

(ヘ) 助動詞の種類をあげよ。

(八三) 口語助動詞の活用は左表の如し。

		希 望		指 定		打 消		尊 敬						
								等						
あや	らう	た	か	て	だ	て	あ	り	ま	に	な	あ	ら	
らう	て	か	ら	せ	ら	あ	ら	ま	ご	な	さ	そ	ら	
							○		せ			ば	れ	
あや	らう	た	か	て	だ	て	あ	り	ま	に	な	あ	ら	
らう	て	か	つ	し	つ	あ	ら	ま	ご	な	さ	そ	ら	
							○		し			ば	れ	
あや	らう	○		て	だ	て	あ	る	り	に	な	あ	ら	
らう	て			す		あ	ら	ま	ご	な	さ	そ	ら	
							ぬ		す			ば	る	
あや	らう	○		て	だ	て	あ	る	り	に	な	あ	ら	
らう	て			す		あ	ら	ま	ご	な	さ	そ	ら	
							ぬ		す			ば	る	
あや	らう	○	○	○	○	て	あ	れ	ま	に	な	あ	ら	
らう	て					あ	ら	ま	ご	な	さ	そ	ら	
							ぬ		す			ば	れ	
○	○	○	○	○	○	○	○		れ			ば	れ	
									り			せ	れ	
									れ			せ	れ	

第一回 口語助動詞の活用は左表の如し

口語助動詞活用圖

指 定	打 消	尊 敬						使 役		可 能		受 身		時			第一活用 <small>(將然)</small>
		りて まご せざ	ま せ	に なら	な さら	あそ ばさ	ら れ	さ せ	せ	ら れ	れ	ら れ	れ	○	○	た	
だ ら	○	りて まご せざ	ま せ	に なら	な さら	あそ ばさ	ら れ	さ せ	せ	ら れ	れ	ら れ	れ	○	○	た	第二活用 <small>(連用)</small>
だ あ り	○	りて まご しざ	ま し	に なり	な さり	あそ ばし	ら れ	さ せ	せ	ら れ	れ	ら れ	れ	○	○	て	第三活用 <small>(終止)</small>
だ あ る	ぬ	りて まご すざ	(ま する) す	に なる	な さる	あそ ばす	ら る	さ せる	せ る	ら る	れ る	ら る	る	よ う	う	た	第四活用 <small>(連體)</small>
だ あ る	ぬ	りて まご すざ	(ま する) す	に なる	な される	あそ ばす	ら る	さ せる	せ る	ら る	れ る	ら る	る	○	○	た	第五活用 <small>(已然)</small>
○	ね	まで ご すざ れり	ま す れ	に な れ	な され	あそ ばせ	ら れ	さ せ れ	せ れ	ら れ	れ	ら れ	れ	○	○	た (たれ) ら	第六活用 <small>(命令)</small>
○	○	○	○	○	な され	あそ ばせ	ら れ	さ せ	せ	○	○	ら れ	れ	○	○	○	

第七章 動詞と助動詞との連続

(八三) いかにすべきかを知らず

いかにすべきかを知らざりき

彼は行くとも我は行かじ

いざ行かむ

我も行かまし

左右兩側面より一時に打たる

高臺に上りて遠近の景色を眺めらる

斥候の兵を樹上に上らす

親しく統監せさせ給ふ

總代をして祝辭を讀ましむ
 花の盛に遭はまほしきものなり
 かく動詞第一活用に連續する助動詞あり。
 今これを表によりて示さん。 將然段

ず	ざり	じ	む	まし
(推量) (未來時)				
る	らる	らる	らす	さす
(受身) (尊敬)				
る	らる	らる	らす	さす
(使役)				
る	らる	らる	らす	さす
(尊敬)				
る	らる	らる	らす	さす
(上下一段活用)				
る	らる	らる	らす	さす
(上下二段活用)				
る	らる	らる	らす	さす
(上下三段活用)				
る	らる	らる	らす	さす
(上下四段活用)				
る	らる	らる	らす	さす
(上下五段活用)				
る	らる	らる	らす	さす
(上下六段活用)				
る	らる	らる	らす	さす
(上下七段活用)				
る	らる	らる	らす	さす
(上下八段活用)				
る	らる	らる	らす	さす
(上下九段活用)				
る	らる	らる	らす	さす
(上下十段活用)				
る	らる	らる	らす	さす
(上下十一段活用)				
る	らる	らる	らす	さす
(上下十二段活用)				
る	らる	らる	らす	さす
(上下十三段活用)				
る	らる	らる	らす	さす
(上下十四段活用)				
る	らる	らる	らす	さす
(上下十五段活用)				

動詞將然段に連用す

(八四)

甲左の文について連續上の誤を正せ。

- (イ) 見るまし聞きましと思ふ事ぞ多かる
- (ロ) 早く歸りて父母の健かなる御姿を拜さまし
- (ハ) 人をして見せしめしかど既にあらざりき
- (ニ) 明日花見に行かむと人していはさせたり
- (ホ) 余はかくの如く精密なる圖を書けず
- (ヘ) つくづくと御覽じさせ給ふ
- (ト) 侍臣を召して鞠を蹴させ給へり
- (チ) かかる剛勇の士を死なさせしは恨事なり
- (リ) 大將しきりに號令せれども更に聞かず
- (ヌ) 安著との報早く聞かまほしきものなり

乙左の語にるらるの何れかを連續せしめて文を作れ。

あむ 水 連 然
 お 終 止
 め け 連 用
 り 將 然
 行 け 終 止

上る 申す 逍遙す 死ぬ

丙 左の語にす・さすの何れかを連続せしめて文を作れ。

得 通ふ 運動す 諭す

(八五) 動物園にて獅子を見て歸りつ

庭の櫻も早や散りぬ

昨日友人を訪ねき

彼は先生に従ひ行きけり

英人の詩集を讀みたり

日ははや西の山に落ちけむ

獨逸語を學びたし

かく動詞第二活用に連続する助動詞あり。

今これを表によりて示さむ。

つ	ぬ	き	けり
+			
動詞第	たり(完了時)		
二活用	けむ		
	たし		

(注意) さの連續に就ては特例あり次項にいへり。

(八六) 動詞が過去の助動詞きに連續するには特例あり。 卽

ち左の如し。

加行三段活用	………	來	第一活用	………	こ	し	か
			第二活用	………	さ	し	か
佐行三段活用	………	爲	第一活用	………	せ	し	か
			第二活用	………	し	き	

(六七) 左の文について連続上の誤を正せ。

- (イ) 飛行機を見せしめむとて弟妹を伴ひて所澤に行きたり
- (ロ) 力を極めて押せしかども戸を開く能はざりき
- (ハ) 二人して扶け乗ししかば漸く乗り習ひつ
- (ニ) 早く仕上げむとてつとめて七し業未だ半にも至らず
- (ホ) 敵兵はここにも來きと聞くは實か
- (ヘ) 的の真中通して射ちければ皆人ほめはやしけり
- (ト) ハタと蹴たたる音ばかりしてまた静寂にかへりぬ

(六八) 花咲くらし

何處に落つらむ

我が家指して行くめり

力は山を抜くべし

かく動詞第三活用に連続する助動詞あり。
今これを表によりて示さむ。

動詞第
三活用

らし	らむ	めり
+ べし (推量可能)		
まじ		

〔注意〕 動詞がべしに連続する際には殊に誤り易し、十分に注意すべし。

(六九) 明日は課業あるべし

難を避くる者も多かるめり

妻子等は我が歸るを待ち居るらむ

らしらむめりべしまじは羅行四段變格活用の動詞に限り
その第四活用に連続す。

(九〇) 左の文について連続上の誤を正せ。

(イ) 花咲かば告ぐるべし

(ロ) いや榮えに榮ゆるめり

(ハ) 皆々彼の舟に乗するらむとも見えす

(ニ) 此所に塵芥捨て可からず

(ホ) 物悲しき秋も來るべし

(ヘ) 今は彼の資財も盡くるらし

(ト) 爲るべき事は早く爲るべし

(九一) 白泡なして轉び落つるなり

龍の天に昇る如し

かく動詞第四活用に連続する助動詞あり。

今これを表によりて示さむ。

二
三
の
期

動詞第⁺なり

四活用⁺如し

(九二) 左の助動詞を用ゐて、その諸活用形を含める文を作れ。

(イ) なり

(ロ) 如し

(九三) 京都に遊べり

ボートレースに加入せり

かく動詞第六活用に連続する助動詞あり。今これを表によりて示さむ。

動詞第⁺四段活用

六活用⁺ 佐行三段活用

〔注意〕 この助動詞は四段活用の動詞と佐行三段活用の動詞との外に
連続することなし。注意すべし。

(九四) 左の文について連続上の誤を正せ。

(イ) わが蹴れるボール高く上りて校門を超えたり

(ロ) 吾が罪贖むとて自ら首を刎ねて死ねり

(ハ) 彼と是とは品質いと異なれり

(ニ) 去年三月彼よりの書面を受けり

(ホ) 彼は吾をすすめて弟と共に船に乗せり

(九五) きて いて 開いて

ぎて いて 磨いて

して いて 指いて

きぎし語尾を有する動詞が完了助動詞つ(殊に、て)に連続

する時は、語尾のきしがいに轉ずる事あり。

ひて うて 伺うて

動詞の語尾ひのうに轉ずることあり。

〔注意〕 音便のうは必ず阿行の假名を用ゐざるべからず。

びて んで 飛んで

みて んで 読んで

動詞の語尾びみの撥音に轉ずる事あり。

ちて つて 持つて

ひて つて 思つて

りて つて 残つて

動詞の語尾ちひりの促音に轉ずる事あり。

動詞の音便

かくの如き現象を動詞の音便といふ。

(六) 書いたて

書きたり

塞いだて

塞ぎたり

死んだて

死にたり

呼んだて

呼びたり

濟んだて

濟みたり

立つたて

立ちたり

云つたて

云ひたり

切つたて

切りたり

口語に於てはきぎにびみちひりの語尾を有する動詞の、てに連続する際には、悉く右の如く音便形をとる。

(七) 左の文について動詞の音便を検せよ。

(イ) 喜んで君の需に應ぜむ

(ロ) 高いと思つた富士山に登つて見ると愈、高い

(ハ) 讀んで 先帝崩御のところに至りそぞろ暗涙に咽ぶ

(ニ) これは西洋から買つて來たのです

(ホ) 勝つて兜の緒をしめよ

(八) 左の文について動詞の語尾を音便に轉ぜしめよ。

(イ) ひそかに君の顔色を伺ひてその氣色を見たり

(ロ) 君に刃向ふものあらば切りて捨つるに何かある

(ハ) 我は高價の笛を買ひたり

(ニ) 岸に立ちて煙波洋々たる大河を望む

(ホ) ああ太刀もよく切れたり切り手もよく切りたり

第八章 助動詞相互の連続

(九) 何事もあそばされず

彼もまた知らざりし如く見ゆ

うれしかるべきなり

疾くに知れるなるべし

助動詞相互の連続はそれぞれ活用のままに動詞と助動詞との連続に同じ。

(一〇) 讀みにけり

遊びたりけり

立てりけり

完了の助動詞は過去の助動詞に連続して、完了の過去に起りし事を表はす。

行きてむ

遊びなむ

咲きにけむ

完了の助動詞は推量の助動詞に連続して、完了の推量をおはす。

(一一) 御覽ぜさせ給ふ

嘉納あらせらる

櫻一枝參らせられ候

尊敬助動詞は重用して更に高度の敬意をあらはす。

(二三) (イ)完了助動詞と過去及び推量の助動詞とを連用して文を作れ

(ロ)尊敬助動詞を連用して文を作れ

第九章 副詞

(二〇三) 雨はいよいよ降りしきりぬ

恩を受けてはかならず報いよ

甚美しき花咲きたり

白艇やや早し

いよいよかならずはそれぞれ動詞降りしきる報いよの意

義を限定し、又甚ややはそれぞれ形容詞美しき早しの意義を限定す。

かく動詞・形容詞の意義を限定する語を副詞といふ。

彼はますます悠々と説き續けたり

風なき空のいと静かにくれゆきぬ

かくの如く副詞はまた副詞の意義を限定する事あり。

悠々静かの如きは、と或はにを伴ひて副詞の用を辨ずるを常とす。

名詞的副詞

かくと或はにを伴ふべき副詞を名詞的副詞といふ。
(二〇四) 左の文について副詞を指摘せよ。

(イ) 今度首席にて御卒業の由誠にめてたく存じ候

(ロ) 項羽更に答へずしてただ坐せよといふ

(ハ) 我はなほ善に與みせむ

(ニ) 信玄はその夜の中に軍勢をまとめはるばるとわが故郷に歸り
けり

(ホ) 悠然として山を見る蛙かな

第十章 語の轉用

(二〇五) 手習ひを勉強なさい

觀るを好みて讀むを好まず

用ゐるを活用せしめよ

早きがよし

つの用法が誤まつて居る

閣下は貴君の御歸朝を待ち給へり

手習ひ・觀る・讀む・用ゐる・早き・つ・閣下・貴君はそれぞれ他語を

名詞又は代名詞に轉用せるものなり。

(二〇六) 余も昔此の地に來りし事あり

洋紙一帖買った

ゆふ月ははや山の端にかくれぬ

見物人著しく増加せり

たとひ落第しても決して落膽するな

一人一人丸木橋を渡つた

よくよく聞きただした後で疑へ

驚きのあまり思はず叫んだ

昔一帖はや著しくたとひ決して一人一人よくよくあまり思はずはそれぞれ他語を副詞に轉用せるものなり。

(二〇七) 一部の書を委しう讀みたり

たくましう太りたる馬なり

かく副詞に轉用せられたる形容詞第一活用の語尾は音便形をとる事あり。

形容詞の音便

尙形容詞の音便形を取るものに善い哉悲しい哉等あり。

(二〇八) 左の文について轉用せられたる語を指摘せよ。

(イ) 世界の中にお前ほど歩みのろい者はない

(ロ) 清み濁りのあるのは世の常だ

(ハ) 雀百まで躍りを止めず

(ニ) 奴お伴申さん

(ホ) よしも悪しも考へる暇はない

(ヘ) 盗みも命のありてこそ

(ト) 君が家の門たたかばやとて來れるなり

(チ) 正しくこれは我が物なり

(リ) 今行かんいざいざ

(ヌ) 臣等がよくあらかじめ知る所にあらず

(ル) 昔この里に翁すみけり

(ヲ) 數多の中から一つ一つ選り出した

(ワ) 昨日ここに參りましたばかりです

(カ) 風甚しう吹き荒れたり

(コ) 雜誌壹部御送り申し上げ候

第十一章 轉換の接尾詞

(一〇九) この金剛石の大きさは世界第一なりといふ
うれしさの餘りに舞を舞ふ

さは形容詞の語幹に連結して、これを名詞に轉換する接尾
詞なり。

(一一〇) 心よげに語りあひたり

たのしげに遊びたはむる

戸を細めにあけて見る

げめは形容詞の語幹に連結して、これを名詞的副詞に轉換
する接尾詞なり。

(一一一) 花やかに飾つた

忍びやかに立ち出づ

やかは名詞又は動詞の第二活用に連結して、これを名詞的
副詞に轉換する接尾詞なり。

(一一二) 敗報しきりに至れども平然たりき

平然トシテキタ

明カデア

月光晝よりも明らかなり

たりなりは名詞的副詞に連結してこれを動詞に轉換する
接尾詞なり。

汝の將來に幸多かれと願ふなり

この色合は餘り美しからず

かりは形容詞又は形容詞形活用の助動詞の語幹に連結して、それぞれ動詞又は動詞形活用の助動詞に轉換する接尾詞なり。

大に才子ぶる

才子ブル

子供のくせに大人ぶる

大人ブル

ぶるは名詞に連結してこれを動詞に轉換する接尾詞なり。

				第一活用 (未然)	第二活用 (連用)	第三活用 (終止)	第四活用 (連體)	第五活用 (已然)	第六活用 (命令)
たり	たり	たり	たり	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ
なり	なり	なり	なり	なら	なり	なり	なる	なれ	なれ
かり	かり	かり	かり	から	かり	かり	かる		かれ
ぶる	ぶら	ぶり	ぶる	ぶら	ぶり	ぶる	ぶる	ぶれ	ぶれ

《注意》 かりには善かれど、美しかれどの如き第五活用形なし。

(二三) 大人しき少年なり

大人シイ

勇ましく戦へり

勇マシク

しは名詞或は動詞第一活用に連結して、これを形容詞に轉換する接尾詞なり。

彼は男らしき男なり

男ラシイ

彼は甚すなほらしく見ゆ

スナホラシク

らしは名詞又は名詞的副詞に連結して、これを形容詞に轉換する接尾詞なり。

		第一活用 (連用)	第二活用 (連體)	第三活用 (終止)	第四活用 (已然)
し	し	しく	しき	し	しけれ
らし	らし	らしく	らしき	らし	らしけれ

(二四) 左の文について轉換の接尾詞を指摘せよ。

(イ) 勇ましげなる顔を見るうれしさ

(ロ) とかく控めにするがよし

(ハ) はてやかに飾りたてて出てゆきたり

(ニ) 野も山も一時に春めきそめぬ

(ホ) 少し長めに切つて下さい

(ヘ) あはれ三郎がおこがましき振舞よ

(ト) 才子ぶる者あり學者ぶるものあり

(二五) 右轉換の接尾詞を分類せよ。

(二六) 右接尾詞を活用せしめよ。

(二七) 全接尾詞を分類せよ。

第十二章 限定詞

(二八) 月も出て蟲も鳴きそめぬ

向ひの家に白く咲けるは何の花ぞ

馬になむ乗りならひける

我が國に勝れる國ありや

世の中は何か常なる飛鳥川昨日の淵ぞ今日は瀬と
なる

ゆきこそ通へ

もはどなむやかこそは種々の語に附隨して、それぞれその
意義を限定するものなり。

限定詞

かかる語を限定詞といふ。

(二九) 苔の衣よ乾きだにせよ

乾キ(ナリモ)

禽獸すら恩を知る

禽獸(サヘ)

明日さへ降らば若菜摘みてむ

明日モ

學問にのみ耽りて世事を知らず

學問ニ(バカリ)

月花のながめなど最も佳なり

ナガメナド

だにすらさへのみなどもまた限定詞なり。

《注意》だにすらさへの用法は誤り易ければ注意すべし。文語のさへは雨さへ風さへ花さへ實さへなど物の重なる場合にのみ用ゐられて口語のさへとは意義異なり。

(三〇) 用言又は助動詞と限定詞との連続左の如し

用言及び助動詞
第三活用

も は ぞ なむ か こそ だに すら さへ のみ

動詞形第四活用
形容詞形第一活用

但用言が體言と同じやうに取扱はるる場合はこの限りにあらず例へば

嬉しきやなど

咲きやそろへる

散るやかなしき

行きだにせば可なり

心清きこそよけれ

等の如し。

(三三) 左の文について限定詞を指摘せよ。

(イ) 敵は鳥合の衆なるぞ

(ロ) 神は天地の主宰にして人は萬物の靈なり

(ハ) 世の中は物毎に新なれども吾のみぞ古りゆく

(ニ) これなむ名に負ふ小松島の景なる

(ホ) その遺跡も今は有りや無しや小生は知らず候

(ヘ) 自然の美は到底人工の美に及ばざるか

(ト) かの豪邁あればこそこの情愛もあるなれ

(チ) いそぎだにせざらば過なかるべし

(リ) 風烈しく吹きいてて雨さへいよいよ降りこそまされ

(ヲ) 戦國亂離の世にてすら然り

(ル) 父の専横を諫むるものただ重盛一人のみ

(三三) 左の限定詞を用ゐて文語文を作れ。

(イ) すら (ロ) だに (ハ) さへ

(三三) 右限定詞に連れる用言の活用形を説明せよ。

第十三章 言と辭

言と辭

(二四) 余は昨日修身の講義を聴きたり

四月一日から授業が始ります

この二文の中余昨日修身講義聴き四月一日授業始りは各一觀念を表し、單獨にて用ゐらる。

然れどもはのをたりからがますはそれぞれ余修身講義聴き四月一日授業始りに伴はれて用ゐられ、是等に或る意義を添へ、又は或る關係を表す從屬的の語なり。前者を言といひ、後者を辭といふ。

國語は言と辭とより成る。

(二五) 前章まで説き來れる詞類を言と辭とに分てば、

語言 名詞・代名詞・數詞・形容詞・動詞・副詞

辭 接頭詞・接尾詞・助動詞・限定詞

(二六) 左の文について言と辭とを指摘せよ。

- (イ) 空は次第に紫色に濁りて生濫き南風面を吹きつ漁夫等が濱に走り出でて忙はしく網を收むる程に雨はらはらと降り來りぬ
- (ロ) 日本の武士は文武二道をかけて嗜みがあるのを最上の理想とした上代の荒魂和魂の思想は即ちこれである

第十四章 文素附獨立語及び句

(二七) 山高し

天候險惡なり

かく語の相契合して、完全なる一思想を組成せるものを文

文

主語

といふ。
文には敘述の題目となる語とこれを敘述する語とを具へざるべからず。

山と天候とは敘述の題目とされる言にして、これを文の主語といふ。

述語

高しと險悪なりとは、それぞれ山・天候を敘述せる言にして、これを文の述語といふ。

文には少くとも主語と述語とを要す。

(二二) 熱き鑛泉多量に噴出す

十月の霜葉は花よりも美し

熱き多量に十月の花よりもは、それぞれ鑛泉・噴出す・霜葉・美

補語

しの意義を補飾す。

かく補飾の用をなす語を補語といふ。

形容詞的補語

熱き・十月のの如く體言を補飾するものを形容詞的補語といひ、多量に・花よりももの如く用言を補飾するものを副詞的補語といふ。

副詞的補語

文素

主語・述語・補語これを文素といふ。

(二三) あはれ今年も秋も去ぬめり

終にかくの如きか、ああ

さばれ余は余の所信を貫かむ

滿堂の生徒諸子余は諸子に告げむとする事あり

瓢や瓢や吾汝を愛す

獨立語

あはれあゝさばれ生徒諸子瓢や瓢やは文を構成せる材料にあらず、完全なる一思想をあらはし、しかも意義に於て文に連続せるものなり。

かかる語を獨立語といふ。

文は文素の外に獨立語を伴ふことあり。

(二三〇) 熱き鑛泉

かくの如き書籍

十月の霜葉

君が八千代に

の如きは未だ完全なる一思想をなさず。

かく未だ一思想を構成するに足らざる語の契合を句とい

句

ふ。

(二三一)

(イ) 文とは何ぞ

(ロ) 句とは何ぞ

(二三二) 左の文について文素獨立語及び句を指摘せよ。

(イ) 我が大隊は今より突撃に移らんとす

(ロ) かれこれするうちに夜は已に更けた

(ハ) 故郷の姉の家に清冽氷の如き井水あり

(ニ) 進め、今は瞬時も躊躇すべき時ではないぞ

(ホ) 二山も追ふ頃はもう朝日が晃々と秋の空に昇つて居た

(ヘ) よし、まづ内に入り給へ

(ト) 忽ち大きな真黒なものが鼻の先きにあらはれる

(チ) 鹽のやうなる雪はらはらと窓の硝子をうつ

(リ) 今は翼なくして空中を飛行する術すら工夫せられたり

(ヌ) 記者足下、僕古今の賢哲英雄に於て別に偏好する所有るにあらず

(ル)素行はその頃の學問といふ學問には悉く通じて居つたといつてもよろしい

(ヲ)君、あすも行かうてはありませんか

第十五章 關係詞

(二三)鳥が鳴く東の空

チュリツブの美しきが咲きたり

故郷の戀しきは幼年の頃の記念の結ばれをるに由るなるべし

前車の覆るを見て後車の戒とす

關係詞

が・のは鳥・美しき・記念前車に附隨して、其の鳴く・咲きたり・結ばれ・覆るに對して主語の格にあることを示す關係詞なり。

(注意) 文語に於ては

雪降る

風寒し

の如く主語格はただ其の位置のみにて示さるる事多しと雖も口語に於ては主語格は

雪が降る

風が寒い

の如く必ずがによりて示さるるものなり。

(二四)父の手紙到來致し候

さびしい秋の心をあぢはつた

東京までの道中には舊跡多し

我が國第一の高山は何ぞ
 あるが中に此の繪最も勝れたり
 のが父・秋・東京まで我あるに附隨して、それぞれ手紙・心道
 中・國中に對して、形容詞的補語の格にある事を示す關係詞
 なり。

〔注意〕 口語に

言ふのは易い

心の清いのが何よりだ

ちとやりすぎたのです

など用言助動詞に連結して、用言句文を體言の格に轉換する用をなす
 ものあり。

(三五) 西洋史を讀む

郷關を出づ
 品性高きを貴ぶ
 余は彼の愛國の士なるを信ず
 利慾に誤らる
 東京に出で勉強しよう
 愛憐の情うすきに似たり
 いふに易く行ふに難き事なり
 雀海中に入りて蛤となる
 日月は流るる水と早し
 此の頃彗星が出るといふが本當か
 隕石天より落つ

牛後たらむより鶏口たらむ
 郷里を出てから十年になります
 余は中心から彼に敬服してゐる
 矢玉のなくなるまで戦つた
 去年朝鮮まで旅行せり

をにとよりからまでは郷關東京蛤天中心朝鮮等に附隨して、それぞれ述語用言に對し、副詞的補語の格をあらはす關係詞なり。

《注意》

(1) 伊太利と土耳其と戦ふ
 文讀むと歌よむとより外の樂なし
 かく文語などを一團に結合するとあり。文語に於ては必ずとを重用し、

決して「文讀むと歌よむより外の樂なし」の如く用ゐる可らず。されど今は一般に誤解を生ぜざる時に限り、最終の語句の下に、之を省くとも妨なきこととなれり。

(2) 各辭の意味は場合によりて非常に變化すれば、讀書の際注意すべし。

手にて打つ

汽車で行きます

烏鵲南へ飛ぶ

にててへは手汽車南に附隨して、補語の格をあらはす關係詞なり。

《注意》へは方位をあらはす辭なれど

東京へつく

富士山へ登る

とはいふべからず。必ず

東京につく

富士山に登る

といふべし。

(二三六) 用言又は助動詞と関係詞との連続左の如し。

動詞形第四活用
 形容詞形第二活用
 用言及び助動詞の第三活用
 用言及び助動詞の第三活用

がをにに
 たりて
 まてり

(注意) 文語に於けるとの連続誤り易し。注意すべし。
 用言及び助動詞の第三活用と

用言及び助動詞の第三活用⁺から

(二三七) 左の文について補語を指摘せよ。

(イ) 艱難汝を玉にす

(ロ) うき事のなほこの上にも積れかし

(ハ) 東の方へと志して家を出づ

(ニ) 車馬の行き通ふ音かまびすし

(ホ) わが君は千代にましませ

(ヘ) かの事は私より申し上ぐべく候

(ト) 一から十まで知らぬ事はない

(二三八) 左の文について誤を正せ

(イ) 山田と河野より外に友達は今居ない

(ロ) コロンブスの船は西に西にと進めり

(ハ) 朝に新橋を發せば夕に大阪へ着くべし

(ニ) 甲をとるものと乙をとるものとあれども歸する所は一なり

(ホ) 太郎次郎三郎と川に遊ぶ

(三九) 以上二項の補語を分類せよ。

第十六章 他動詞自動詞附主語の轉換

(四〇) 人をつく牛の角を切る

頼朝義經をして義仲を攻めしむ

父子に財産を譲る

樂師歌を歌ひ舞を舞ふ

山を下り川を渡る

他動詞

つく・切る・攻め・譲る・歌ふ・舞ふ・下り・渡るの如く、動作の仕向けらるる補語を要する動詞を他動詞といふ。

(注意) この補語は必ず關係詞を取る。

(四一) 人牛につかる

義經頼朝に義仲を攻めしめらる

子父に財産を譲らる

主語の轉換

他動詞の補語は動詞を受身にすることによりて、文章の意義を變ずることなく、主語と位置を轉換することを得。これを主語の轉換と云ふ。

(注意)

歌を歌ふ・舞を舞ふの如く、動作と同義をあらはす補語及び山を

下り河を渡るの如く動作の行はるる場所をあらはす補語は主語の

轉換を爲す能はず。總じて主語の轉換には慣例あり。注意すべし。

(二四三) 風が吹く

東京に安着す

旅行より歸る

吹く・安着す・歸るの如く、をを伴ふ補語を要せざる動詞を自

動詞といふ。

自動詞の補語は主語の轉換を爲す能はず。

《注意》動詞には同形にて自他兩様に用ゐらるるものあり。

(二四四) 左の文について他動詞を指摘せよ。

(イ) 笛を吹きつつ行く人あり

(ロ) 信玄塵扇をあげて敵をふせぐ

(ハ) 蟲の音しきりに聞ゆ

(ニ) 大病をわづらひました

(ホ) 畠中に一本の柳立てり

(ヘ) 門を出づ

(ト) 優勝旗を校門に押し立つ

(チ) 巨船濤を蹴つて進む

(リ) このあたり目に見ゆるもの皆涼し

(二四五) 右の例文について主語の轉換を行へ。

第十七章 接續詞

(二四六) 紙筆及び墨を買ふ

野球の競技か或は端艇の競漕を觀ませう
西軍は最後の突喊を試みき然れども効なかりき
何處へも出ませぬですからいつても御都合次第で
御出で下さい

接續詞

及び或は然れどもですからの如く語句或は文を連結する
語を接續詞といふ。

(一四六) 日本の地山は優にして水は清し

夜はふけぬとも約束は履行せむ

春來ぬと人はいへども鶯の鳴かぬ限はあらじとぞ

思ふ

夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこに月

やどるらむ

大物の浦より船にて下られけるが折節西の風烈し
う吹きければ判官の船は住吉の浦へ打ち上げられ
けり

にしてともどもをがば等も接續詞なり。

(一四七) 前項にあげたる接續詞の他語に連續する形に一定の
法あり。

にして 體言又は名詞的副詞

とも 用言又は助動詞の第三活用

ども 動詞及動詞形第五又は形容詞及形容詞形

第四活用

を

動詞及動詞形第四又は形容詞及形容詞形

第二活用

が

同前

用言又は助動詞の第一活用

ば

動詞及動詞形第五又は形容詞及形容詞形

第四活用

〔注意〕 ばの連続法は最も誤り易きものなれば殊に注意すべし。

月を見れば心慰まむ

見ルナラバ

獅子の怒れる様を見れば魂も消ゆる心地す

見ルト

折節西の風烈しう吹きければ判官の船は住吉の浦へ打ち上げ

られけり

吹イタ故

第二用例と第三用例とは形の上の區別なし。文勢によりて識別せざ

るべからず。

ともの連続は第四活用に誤り易し。注意すべし

(一四) 花咲き鳥歌ふ

色美しく香かんばし

右の文は用言の活用によりて連続するものなり。

かく接續詞なくして連続することあり。

(一五) 氣候もよいし交通も便利です

山に行つたり海に行つたり夏中旅行ばかりしてゐ

ました

したりは口語に限りて用ゐらるる接續詞なり。

しは用言又は助動詞の第三活用に連続す。

たりは動詞又は動詞形助動詞の第二活用に連続す。

(二五〇) 左の文について接續詞を指摘せよ。

- (イ) 入學試験科目は算術及び國語なり
- (ロ) 彼は辯論に秀て又運動に長ず
- (ハ) 法律を學ばんか或は醫業を修めむかと迷ひ居たり
- (ニ) 自ら過てりと氣附かばそれにてよし
- (ホ) 今日午前中に行かうと思ふから早く來給へ
- (ヘ) 行けども行けどもはてなき海
- (ト) 彼は品行方正にして學業優秀なり
- (チ) 私はあたりを隈なく捜しましたが見當りませぬ
- (リ) 遠いとは申しますけれども汽車で參ればすぐです
- (ヌ) 今日明日とは思はざりしを早くも來にけるかな

(二五一) 右の文について口語は文語に、文語は口語に改めよ。

(二五二) 右の接續詞に連れる用言の活用形を説明せよ。

第十八章 感動詞

(二五三) あはれ心知れる友も訪へかし

ああ老いず死なずの薬もがな

すは敵の寄せ來るぞや

やよ待て兄弟よ

あはれ・ああ・すは・やよなどは咏嘆又は言ひ懸けの意をあらはす語なり。

かかる語を感動詞といふ。

(二五四) かしがなぞやよの如き辭も感動詞なり。

感動詞

これらの感動詞は種々の語に連結して、感動の意をあらはす辭なり。

(二五) 左の文について感動詞を指摘せよ。

- (イ) あはれうれしきかなこの勝ちいくさ
- (ロ) いてその時の戦の有様談つて聞かせ申さむ
- (ハ) 梅が香を櫻の花に匂はせて柳の枝に咲かせてしがな
- (ニ) 山田君はまことに感心な勉強家です
- (ホ) 今日はなんだかいやな天気だな
- (ヘ) やこれは路が異つた様だ
- (ト) いざ行かん雪見にころぶところまで
- (チ) まあこの花の綺麗なこと
- (リ) ちや君もお出でてすか

(二六) 右感動詞の連結せる用言又は助動詞の活用形を説明

せよ。

第十九章 呼 應

(二七) 思想古し

世を渡るに道あり

水流瀧の如し

聴衆多かりき

古しあり如しきはいづれも用言或は助動詞の第三活用に終止せるものなり。

(二八) 思想ぞ古き

世を渡るに道こそあれ

水流なむ瀧の如き

聴衆や多かりし

ぞなむや或はかの如き限定詞の加はれる時は動詞及動詞
 形第四形容詞及形容詞形第二活用にて終止し、こその加は
 れる時は動詞及動詞形第五活用又は形容詞及形容詞形第
 四活用にて終止するものなり。ぞなむやかこそを係りと
 いひ、これに應ずる用言及び助動詞の活用をそれぞれの結
 びといふ。而してその呼應を係結法と名づく。

〔注意〕 口語には係結法なし。

(二五) 係りは同一文或は同一節に於て重用せらるることな

係り
結び
係結法

し。

世の中なむ何か常なる

余は今年こそ英語をぞ學ぶべかりき

右の二文は誤りなり。

(二六) 世の中は何か常なるとぞ詠みし

君こそ行くべきに却つて余を促す

花ぞ散り過ぎぬれども香は今ものこれり

かく結びの用言又は助動詞が、と以外の語に連る場合には
係結法行はれず。

(二六) 係結法は其を有する一文の内に於てのみ行はる。

君こそ行くべきに却つて余を促せ

花ぞ散り過ぎぬれども香はこのれる

人もかくこそとばかりの給ひさしつれ

右の如きは誤りなり。

(二六三) 明日天氣よくば出行かむ

昨日天氣よかりしかば出行きたり

明日は天氣よくとも行かざるべし

今日は天氣よけれども行かず

一及び三の例は共に未定の条件をあらはし、二及び四は既定の条件を表はす。かくの如く条件が未定なるときは未定の語にて應じ、既定なるときは既定の語を以て應ずるものとす。

条件の呼應

かくの如きを条件の呼應といふ。

(二六三) 左の文につきて係結法及び条件の呼應の誤を正せ。

(イ) 人こそそむき給ふとも余ばかりは永く仕へ奉れ

(ロ) 昨日の蝶はいかにやなるらめ

(ハ) 私こそ思ひも寄らぬ御無沙汰仕りさふらふ

(ニ) 父母おはしまさばさぞや喜び給ひぬらめ

(ホ) そこひなき淵やはさわげ山川の浅き瀬にこそあだ波はたつ

第二十章 節の種類

(二六四) 風吹く

花散る

節

風吹き花散る

右第三の文は風吹きといふ文と花散るといふ文と合して、更に大なる一文を構成せるなり。

かく更に大なる文を構成する小文を節といふ。

(二六) 汽船の波を蹴つて行くが見ゆ

旅順は要害堅固なり

月さやかなる夜静かに往事を懐ふ

光陰の過ぐるは矢の飛ぶよりも早し

春のくれゆくを惜しむ

右の五文はそれぞれ主語・述語・主語の補語・述語の補語が節にてなれるものなり。

竝立節

かく文素をなせる節を附屬節といふ。

(二六) 櫻は散り藤は未だ開かず

山は青うして水は白し

酒を飲み且詩を歌ふ

右三文の節は互に文素をなす事なく、各々同等の節の合して一文をなせるなり。

かかる節を竝立節といふ。

(二七) 左の文について節の種類を指摘せよ。

(イ) 生あるものは必ず死す

(ロ) 此の物語の如く人の心を傷ましむるはなし

(ハ) 誰もかも日にやけて色はいやまことに黒くなる

- (ニ) 故郷の春を見むとて三月早々寓を出づ
- (ホ) 月光夢の如く櫻花霞に似たり
- (ヘ) 君が代の喇叭が聞え各隊一齊に萬歳を叫んだ
- (ト) 智者は惑はず勇者は恐れず

第二十一章 文の種類

(二六) 月東山に出づ

ふりゆくものは我身なりけり
 進むを知つて退くを知らざる人は與に兵を談ずべ
 からず。
 あはれ今年もくれんとす

單文

三景といふ

陸前の松島・丹後の天の橋立・安藝の嚴島これを日本
 右の文には多くの句を有するものありといへども、何れも
 唯一の思想をあらはせるのみ。

かかる文を單文といふ。
 單文は節を有せず。

(二六) 諺に曰く二兎を逐ふものは一兎をも得ずと

人の來るに會ふ
 敵は幾萬ありとてもすべて烏合の勢なるぞ
 若し果して然らば實に憂ふべき事なり
 東京は面積廣く人口多し

複文

右の文はいづれも數個の思想を有すれども、一の思想は他の思想に對し從屬的關係に立てるものなり。かかる文を複文といふ。

複文は文素として一個以上の附屬節を有す。

(二七〇) 柳は綠に花は紅なり。

膽は大にして氣は小なり

待つ人は來て月は出でにけり

右の文はいづれも數個の思想を有し、その思想は互に對等的關係に立てるものなり。

かかる文を合文といふ。

合文は竝立節にて成る。

合文

文はその構造上より單文・複文・合文の三種に分つ。

(二七一) 左の文について單文・複文・合文を指摘せよ。

- (イ) 今や我が國は世界の一等國となれり
- (ロ) 春の特色はどこまでも駘蕩といふ點にある
- (ハ) 余はいつの間にか一人棧橋に残された
- (ニ) 近き舟は行けども遠き帆影は動くとも見えず
- (ホ) 帆を張りて出てゆく船あり櫓をあやつりてかへる舟あり
- (ヘ) 傘をかざして隄に立てば暮雨煙の如し
- (ト) この父なくばこの子あらざるべし
- (チ) 文人國に詩歌の語多く武人國に武人の語繁昌す
- (リ) 軍旗はひらひらと陣頭に翻り萬歳の聲は潮の如くに涌いた

第二十二章 文素の位置及びその倒置

(二七) 文素の位置は次の如くなるを常とす。

副詞的補語

形容詞的補語

主語

副詞的補語

形容詞的補語

述語

則主語は述語の上に補語は被補語の上に位す。然れども述語の補語が節にて成れる時は、其の位置文首に在ること多し。

《注意》 余は昨日學校に行きて生徒の成績を一覽せり

余は昨日我が軍奉天を占領せりと聞けり

右第一例は「昨日が「行き」を限定するものと観るも「一覽せり」を限定す

るものと観るも差支へなしといへども、第二例は「昨日が占領せり」を限定するものと「聞けり」を限定するものによりて相違あり。故に「占領せり」を限定するものならば

余は我が軍昨日奉天を占領せりと聞けり

とし、「聞けり」を限定するものならば

余は我が軍奉天を占領せりと昨日聞けり

とすべし。

彼は徐ろに再擧の策を講じたり

彼は突然東京へ出發せり

午前八時汽車名古屋を發す

我が軍敵を平壤に破る

奉天に敵を破る

右數例に示す如く副詞的補語が二個以上重用せらるる時は互に前後あり。

(二七三) 會則は幹事これを定む

兄には父これに數學を學ばしめ弟にはこれに英語を學ばしむ

彼俊才ならむとは余これを豫言したりき

松島・巖島・天の橋立これを日本三景といふ

かく特に注意を要する語を文首に提示する事あり。

會則は兄には等の如く提示せられたる語を提示語といふ。

この場合文法上の補語はこれをこれになり

(二七四) 薺の美しきが咲きたり (美しき薺さきたり)

提示語

人の馳せ來るにあふ

(馳せ來る人にあふ)

かく印象を強くするため形容詞的補語と被補語と其の位置を轉換する事あり。

(二七五) 如何にかせし杉野兵曹長は

いふ事なかれ今年學ばずして來年ありと

いざや歌はむ諸共に

とく歸れ父母の待ちおはせんに

かく文意を強うするため述語を文首に倒置する事あり。

(二七六) 左の文について文素を倒置せよ。

(イ) 試験は何日から始まるだらうか

(ロ) 向島に花見に行かう

い富貴にして故郷に歸らざるは錦衣て夜行くが如しとは誰れの言ひしことぞ

(二) 奈破翁は能はずといふ字は愚人の字書にありといへり

(ホ) 京都の名所舊跡を心ゆくまで巡覽せむ

(ヘ) 秋を悲しいとは誰が言ひそめたことだらう

(ト) 三景の中宮島最も勝れたりと余は豫てより思へり

(チ) 彼は其の後如何なる業に従事せしやらむ

第二十三章 文素の省略

(二七) 來四月十五日隅田川に於て **主語** 端艇競漕會を催す。

寺から里へ **述語**

柳は緑 **述語の一部** 花は紅 **述語の一部**

至急 **副詞的補語** 返へして下さい

形容詞的補語 通知は受取つたがまだ **主語** 着かな

す

かく文素は自明なるときは省略せらるる事あり。

(二七) 左の文について文素を省略せよ。

(イ) 明日私は弟と共に參上いたしませう

(ロ) 義士の事蹟を讀んで感動しないものはなく義士の墳墓に謁して發憤しないものはない

- (ハ) 君は舟なり臣は水なり
- (ニ) いざ我も行かむ君待ち給へ
- (ホ) 強き芽を残し置きて弱き芽を摘みとれ
- (ヘ) 桃も咲きたり櫻もわらへり

(二七) 左の文について省略せられたる文素を補へ。

- (イ) 善に導き悪におとしいるべからず
- (ロ) 昨夜豚兒上京頓に寂寥を感じ申し候
- (ハ) 南船北馬一日も讀書に親しむべき餘暇なし
- (ニ) 朝に道を聴かば死すとも厭はじ
- (ホ) 君は千代まで八千代まで

第二十四章 文の解剖

(二八) 文の解剖とは文を分解して文素を摘出し、その関係を明かにする法をいふ。

文は左の順序を以て解剖すべし。

- (一) 文の主語
- (二) 文の述語
- (三) 主語の補語
- (四) 述語の補語
- (五) 提示語
- (六) 獨立語

文素の節にて成れるときは、先づこれを文素として摘出し、たる後、文を解剖する場合と同じき順序に従ひて分解すべし。

(二六) 例解一

(一) 喫煙はこれを嚴禁す

文種 單文

主語 (省略)

述語 嚴禁す

述語の補語 これを

提示語 喫煙は

(二) 櫻が咲き揃つて居る景色は譬へやうもなく立派だ

文種 複文

主語 景色は

述語 立派だ

主語の補語 櫻が咲き揃つて居る(節)

述語の補語 譬へやうもなく(句)

節の主語 櫻が

節の述語 咲き揃つて居る

(三) 權謀に長ずるものは屢、徳操を闕き節義を重んずるものは往々術策に乏し

文種 合文

第一節の主語 權謀に長ずるものは(句)

同 述語 屢徳操を闕き
 第二節の主語 節義を重んずるものは(句)
 同 述語 往々術策に乏し

(一八三) 例解二

(一) 月の光は季節によつて感じやうが異ふ
形補 主 副補(句) 主 述(附屬節)

文種 複文

(二) 野川の水のちらちらと動くは小魚の群の驚きて逃ぐるなり
形補 主 副補 述 形補 主 副補 述(附屬節)

文種 複文

第一節ノ副補(附屬節)
 主 述 主 形補 副補 述 主 述 主 形補
 (三) 氣霽れては風新柳の髪を梳り氷消えては浪舊苔の鬚を洗ふ
副補 述 主 形補 副補 述 主 述 主 形補

文種 合文

(一八三) 左の文を解剖せよ。

- (イ) 雨車軸を流すが如し
- (ロ) 日は彼方の森に沈んで夕煙があなたこなたの村々に立登る
- (ハ) 體育はこれを忘るべからずといへども運動に耽るべからず
- (ニ) 天然の大公園に棲む我國民が其の一木一草をなつかしむは自然の情なるべし

(ホ) 嗚呼我が國今や日本の日本に非ずして世界の日本となれり

(ハ) 少女手をうちて鯉をよび穉兒立ちて麩を與ふ
 (ト) 闘ふ道を知つて謀る道を遣るる者は戦勝つて或は屈し謀る道を知つて闘ふ道を遣るる者は勢利にして或は敗る

第二十五章 品詞法及び文章法

(二八) 國語を組成する言辭を分ちて、名詞・代名詞・數詞・形容詞・動詞・副詞・接續詞・感動詞・助動詞・關係詞・限定詞・接頭詞・接尾詞の十三品詞とす。

品詞各個の性質・形態を説明するを品詞法といふ。
 品詞の分類表左の如し。

品詞法

名詞	一 二 一〇五
代名詞	九 一 一〇五
數詞	一七 一 二一
形容詞	二五 一 二七 三〇 一〇七
言動詞	三四 一 四四 四九 八三 一 九八 一四〇 一 一四二
副詞	一〇三 一〇六 一〇七
接續詞	一四五
感動詞	一五三
助動詞	五一 一 八二 九九 一 一〇二
關係詞	一三三 一 一三六

辭

限定詞	一一八—一二〇
接續詞	一四六 一四七 一四九
感動詞	一五四
接頭詞	五 三二
接尾詞	六一五 一〇九—一一三

(二五) 文を組成する言の關係を説明するを文章法といふ。
文章法に於ける研究の對象を表示する事左の如し。

(イ) 文素	述語	一三七
	主語	一二七 一四一
	補語	一三八
	形容詞的補語	副詞的補語
(ロ) 句		一三〇

(ハ) 節	竝立節	一六六
	附屬節	一六五
	單文	一六八

(ニ) 文	複文	一六九
	合文	一七〇

(ホ) 提示語 一七三

(ヘ) 獨立語 一二九

(ト) 呼應	係結法	一五七—一六一
	條件の呼應	一六二

(チ) 文素の位置及び倒置 一七二—一七五

(リ) 文素の省略 一七七

(五) 文の解剖 一八〇—一八二
以上

日本文法 終

附録

文法上許容すべき事項

- 一 「居リ」恨ム「死ヌ」ヲ四段活用ノ動詞トシテ用キルモ妨ナシ
- 二 「シクシシキ」活用ノ終止言ヲ「アシシ」「イサマシシ」ナド用キル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ
- 三 過去ノ助動詞ノキノ連體言ノ「シ」ヲ終止言ニ用キルモ妨ナシ

例

火災ハ二時間ノ長キニ互リテ鎮火セザリシ

金融ノ靜謐ナリシ割合ニハ金利ノ引弛ヲ見ザリシ

四 「コトナリ」異「ヲ」コトナレリ「コトナリテ」コトナリタリ「ト用キルモ妨ナシ

五 「ハ」セサス「トイフベキ場合ニ」セ「ヲ略スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例

手習サス

周旋サス

賣買サス

六、「ハ、セラル」トイフベキ場合ニ、「ハ、サル」ト用キル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例

罪サル

評サル

解釋サル

七、「得シム」トイフベキ場合ニ「得セシム」ト用キルモ妨ナシ

例

最優等者ニノミ褒賞ヲ得セシム

上下貴賤ノ別ナク各其地位ニ安ンズルコトヲ得セシムベシ

八 佐行四段活用ノ動詞ヲ助動詞ノ「シ、シカ」ニ連ネテ「暮シシ時」「過シシカバ」「ナドイフベキ場合ヲ「暮セシ時」「過セシカバ」「ナドトスルモ妨ナシ

例

唯一遍ノ通告ヲ爲セシニ止マレリ

攻撃開始ヨリ陥落マデ僅ニ五箇月ヲ費セシノミ

九 てにをはノ「ハ」動詞助動詞ノ連體言ヲ受ケテ名詞ニ連續スルモ妨ナシ

例

花ヲ見ルノ記

學齡兒童ヲ就學セシムルノ義務ヲ負フ

市町村會ノ議決ニ依ルノ限リニアラズ

一〇 疑ノてにをはノ「ヤ」ハ動詞形容詞助動詞ノ連體言ニ連續スルモ妨ナシ

例

有ルヤ
面白キヤ
父ニ似タルヤ母ニ似タルヤ
二 二てにをはノ「ト」ノ動詞使役ノ助動詞及受身ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例

數百年ヲ經ルトモ
如何ニ批評セラルルトモ
強ヒテ之ヲ遵奉セシムルトモ
二 二てにをはノ「ト」ノ動詞使役ノ助動詞受身ノ助動詞及時ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例

月出ヅルト見エテ
嘲弄セラルルト思ヒテ
終日業務ヲ取扱ハシムルトイフ
萬人皆其徳ヲ稱ヘケルトゾ
二三 語句ヲ列舉スル場合ニ用キルてにをはノ「ト」ハ誤解ヲ生ゼザルトキニ限リ最終ノ語句ノ下ニ之ヲ省クモ妨ナシ

例

月ト花
宗教ト道德ノ關係
京都ト神戸ト長崎ヘ行ク
最終ノ「ト」ヲ省クトキハ誤解ヲ生ズベキ例
史記ト漢書①ノ列傳ヲ讀ムベシ
史記ト漢書ノ列傳①ヲ讀ムベシ

一四 上ニ疑ノ語アルトキニ下ニ疑ノてにをはノ「ヤ」ヲ置クモ妨ナシ
例 誰ニヤ問ハン
幾何ナルヤ
如何ナル故ニヤ
如何ニスベキヤ

一五 てにをはノ「モ」ハ誤解ヲ生ゼザル限リニ於テ「トモ」或ハ「ドモ」ノ如ク用キ
ルモ妨ナシ
例

何等ノ事由アルモ(アリトモ)議場ニ入ルコトヲ許サズ
期限ハ今日ニ迫リタルモ(タレドモ)準備ハ未ダ成ラズ
經過ハ頗ル良好ナリシモ(シカドモ)昨日ヨリ聊カ疲勞ノ狀アリ
誤解ヲ生ズベキ例

請願書ハ會議ニ付スルモ(ストモ)之ヲ朗讀セズ
給金ハ低キモ(ケレドモ)應募者ハ多カルベシ
一六 「トイフ」「トイフ」語ノ代リニ「ナル」ヲ用キル習慣アル場合ハ之ニ從フモ妨
ナシ

例
イハユル哺乳獸ナルモノ
顔回ナルモノアリ

理由書

國語文法トシテ今日ノ教育社會ニ承認セラルルモノハ徳川時代國學者ノ
研究ニ基キ専ラ中古語ノ法則ニ準據シタルモノナリ然レドモ之ニノミ依
リテ今日ノ普通文ヲ律センハ言語變遷ノ理法ヲ輕視スルノ嫌アルノミナ
ラズコレマデ破格又ハ誤謬トシテ斥ケラレタルモノト雖モ中古語中ニ其

用例ヲ認メ得ベキモノ尠シトセズ故ニ文部省ニ於テハ從來破格又ハ誤謬ト稱セラレタルモノノ中慣用最モ弘キモノ數件ヲ舉グ之ヲ許容シテ在來ノ文法ト竝行セシメンコトヲ期シ其許容如何ヲ國語調査委員會ニ諮問セシニ同會ハ審議ノ末許容ヲ可トスルニ決セリ依テ自今文部省ニ於テハ教科書檢定又ハ編纂ノ場合ニモ之ヲ應用セントス(明治三十八年十二月二日 文部省告示第五百五十八號)

大正元年十二月二十五日印刷
 大正二年九月二日訂正再版印刷
 大正二年九月五日訂正再版發行

大正七年度 臨時定價 金四拾六錢

定價 金四拾錢
 大正六年度 臨時定價 金四拾參錢

著作
 所有

大正六年度 臨時定價 金五拾六錢

編者

吉澤義則
 京都市上京區無車小路町六十八番地

發行者

上原才一郎
 東京市神田區裏神保町六番地

發行所

光風館書店
 東京市神田區裏神保町六番地
 (電話本局二千三十九番 振替口座東京三二七番)

印刷者

四海民藏
 東京市神田區裏神保町六番地

本館發行ノ教科書ハ常に多數ノ製本準備有之候ニ付萬一各地賣捌所に賣切等にて課業ニ御差支ノ節ハ直接御注文被下候ハ直ちに御送附可致候



広島大学図書

2000068974

